

ラフォーヤ高原で見た14年ぶりの皆既

山本 威一郎

移動するバスの窓から自分が乗っているバスの影が道路にくっきりと見えは始めた。第2接触まであと10分。太陽が見えてきたのだ！ 1980年のインド日食以来のコロナとの再会がペルーで現実のものとなる……。今から36年前、まだ小学校4年生の時、八丈島の金環日食を自宅の新宿で欠けゆく状況を眼視スケッチし、気温変化をノートに記録したことが日食とのつきあいの第一歩であった。1963年北海道日食（東京では1%）を始め、部分日食はすべて観測していた中・高校生の頃。1968年、1972年ではアマチュアが海外へ日食観測に行き始め、金のない自分はそれをただ他人事と見ていた学生時代。そしてバイトで何とか自分も参加できるようになった1973年アフリカ日食。大学OB会で組織したチームであり、1976年オーストラリア日食、1980年インド日食とたて続けに良く行ったものだった。そして、1983年のインドネシアを中心とした日食ではNHKの調整室で高柳雄一氏（現解説委員）の番組支援をして以来、これを最後に日食とは遠ざかってしまった。……そんな思いが走馬燈の様に浮かんだわずかの間であった。バスはバトカーを先頭に3台（全員で120名位か）がまっすぐな道をメータ振り切り状態で約30分。望遠鏡と残留希望者（30名弱）を残し、たどり着いたのは、平原のどまん中である。皆既まであと5分。太陽にうすい雲はあるもののまぶしく光っている。全員バスから飛び降りるやすぐに観望体制に入り、ダイヤモンドリング、コロナと十分に堪能できた。今回の日食は影も小さく、周囲は暗くなかった。シャドウバンドも見えず、早朝の日食とあって本影錐のスピードも速く、少々もの足りない気もしたが、それよりも皆既30分前に観測地点を見捨て、バスで晴れ間をさがしに行き、見事これに応えることが出来たという、まさに間一髪という日食は初めてであり、感動した次第である。

今回の日食ほど、全く事前準備をせずに観望（測ではない）したことはない。観望も双眼鏡のみ、写真なしという状況である。本来日食病患者の一人としては充分サイトサーベイ、局地計算、測位機材、8mmVTRと直結した接触時刻観測などすべきであったが、14年のプランクが良いリハビリになってしまって、今やすっかり健康人(?)に戻ってしまった。

今回は入社××年のリフレッシュ休暇とあって何とかフリータイムを得ることができたが、次回は全く不明である。しかし、病原菌がまた乗り移ったことだけは事実である。

1973年当時、アフリカ日食へ参加した日本のアマチュアは100人程だったと思う。あれから21年、日食ウィルスは確実に増えていることだけは、今回の日食に参加してわかったことである。

病名は潜伏期間が少なくとも14年はある再発性日食コロナ病とでも命名しておきましょう

か。

最後に、阪急交通社のツアーに全く気楽な立場で参加させていただきましたが、添乗員、スタッフの方々、本当にご苦労様でした。



ラフォーヤ高原の小学校校庭にて（移動前）



急遽バスで移動（観測後の風景）